

とが退院後にわかった。がんの四大治療に加
 和を優先的に行う治療を保存的治療と呼ぶこ
 自然治癒力や自然の経過に任せて、症状の緩
 ない。危険性や体の負担が大きい治療を避け
 存的治療があるそうだと。これは知らされてい
 がん剤治療、放射線治療だが、そのほかに保
 ことである。がんの三大治療は外科治療、抗
 て退院を認められた。私が選んだのは何もしい
 は渋り難色を示したが、しまいにはあきらめ
 れたがすべて固辞し退院を申し出た。主治医
 同時に肝臓がんも発見された。手術を薦めら
 すい臓の一部が破裂、出血して緊急入院した
 為徒食の日々になった。その結果であろうか
 摂生そのものといった暴飲暴食、退職後は無
 りながら考える年代であった。現役当時は不
 昭和の終わりからバブル経済の崩壊まで、走
 教えられた。所得倍増計画から高度成長期、
 て今年五月に他界した。先輩にはずいぶんと
 いた長老は、七年間抗がん剤の副作用と闘つ
 「生きてさえおれば何とかかなる」と名句を吐

えてほしいと願っている。平均寿命を超えた
 がん患者が、副作用や合併症を気に病みなが
 ら余生を送るのも人生だが、何もしないこと
 も選択肢として悪くはない。飢え、病、貧困
 の解決に尽力したのは昭和の世代、今では豊
 かな生活に慣れ、毎日が空腹であったことも
 忘れてしまった。入院中すい臓治療のため一
 週間の絶飲食を経験した。その後退院前に重
 湯に変わった。これが実においしい。細胞が
 生まれ変わったように高揚し至福の境地であ
 った。現在ではどこかで天災に遭遇するかわか
 らない。どのような事態でも数日間辛抱すれ
 ば必ずや救援されるであろう。絶飲食の体験
 は非常事態でも有益である。退院後はかかり
 つけ医に受診し、基礎代謝量の流動食になっ
 たが、体調もよく安定している。医師からは
 次に出血すれば絶命と宣告されており、妻は
 死支度をせきたてる。「どっこい、くたばる
 ものか」と開き直って気合いがかかると、一
 番生きぬく力を感ずる今日この頃である。